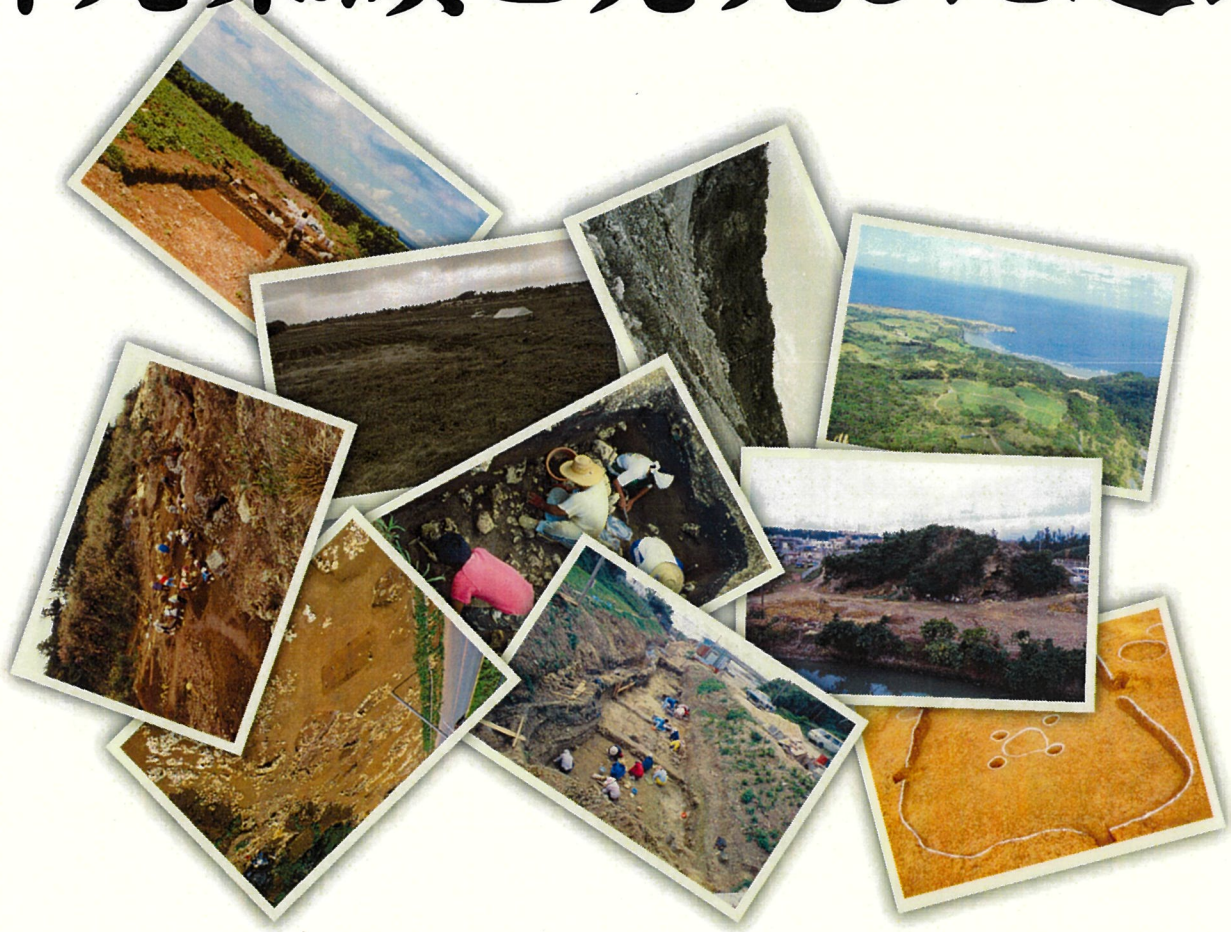


多和田眞淳先生生誕百年記念第2弾

多和田眞淳先生の 研究業績と発見した遺跡



開催期間 9月29日(土)～10月28日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「多和田眞淳先生の研究業績と発見した遺跡」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

企画展「多和田眞淳先生の研究業績と発見した遺跡」を開催するにあたり、ごあいさつを申し上げます。

今年は沖縄考古学研究をはじめとした学術分野に多大な影響を与えた多和田眞淳先生の生誕 100 年にあたり、これを記念して当センターでは春にパネル展「多和田眞淳先生生誕百年記念」及び第 26 回文化講座「多和田眞淳先生生誕百年記念シンポジウム」を開催し、沖縄考古学会の方々をはじめ県内外から多くの方々の参加を得て、活発なご意見等を頂きました。今回の企画展は前回のパネル展に引き続き、多和田眞淳先生の沖縄考古学における足跡を紹介する内容となっております。

多和田眞淳先生は考古学的調査が散発的に行われていた戦前戦後の沖縄県内外において、在地研究者として奄美諸島から先島諸島各地における遺跡踏査を精力的に行い約 180 件の遺跡を発見されました。これらの調査成果などから 1956 年に「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」を発表され、特に沖縄で初めて体系化された「琉球貝塚の編年表」はその後の貝塚時代の編年指標となるなど数多くの先駆的な研究調査活動を行いました。

また、研究活動を邁進する一方 1956 年には琉球政府文化財保護委員会の文化財専門審議員となり、県内文化財の保護や若手研究者の育成などに対しても多大な貢献をされました。

今回の企画展では、多和田眞淳先生が発掘調査に関わった宇佐浜遺跡などをはじめとした奄美諸島以南の遺跡や出土した土器に関する研究、貝塚時代の編年概念の創設などについて、当センター所蔵の伊波式土器・荻堂式土器などの土器類や石器、貝製品などを実際に展示しながらパネル解説をおこなっております。

今回の企画展において、多和田眞淳先生の多大な活動実績の一端を多くの県民の皆様にお伝えすることができれば幸いです。

2007（平成 19）年 9 月 29 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 名 嘉 政 修

展示のあらまし

今回、多和田眞淳先生生誕百年記念第2弾として、企画展「多和田眞淳先生の研究業績と発見した遺跡」を開催します。

企画展の内容として、多和田先生の研究業績の一つである、土器研究の研究について、現在も使われている5型式（伊波式土器、荻堂式土器、大山式土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器）の解説と、1956（昭和31）年の『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』の中で発表した、現行編年表の基礎となる『琉球貝塚の編年表』の解説、各研究者の編年表の比較も試みました。

また、多和田先生が発見した174箇所の遺跡の中から、沖縄県が日本本土に復帰した1972（昭和47）年から現在までに、沖縄県教育庁文化課が発掘調査を実施した内の13遺跡を選択しパネル解説や当センター所蔵遺物の展示を行います。内訳は、沖縄本島内の沖縄貝塚時代早期・前期・中期（縄文時代早～晩期）9遺跡（野国貝塚群、伊武部貝塚、百名第二貝塚、仲宗根貝塚、喜友名貝塚、知花遺跡、久米島大原貝塚、宇佐浜遺跡、宮城島シヌグ堂遺跡）、沖縄貝塚時代後期（弥生時代～平安時代）の2遺跡（貝志原貝塚、牧港貝塚）、先島諸島は先史時代～歴（原）史時代の2遺跡（下田原貝塚、平得仲本御嶽遺跡）です。また、多和田先生が型式設定を行った土器の解説や、発見した遺跡の分布図、一覧表を紹介します。

考古学において、遺跡の時期や年代を決定する上で基準となるのは土器であり、また、編年表は重要な役割を果たしています。今回の企画展は、多和田先生が型式設定を行った土器をメインに展示しています。

なお、今回のパネルや図録について、沖縄本島の遺跡の時期は現行編年（沖縄考古学会監修）を用い、先島の遺跡は石垣市史による八重山の考古学編年（石垣市史 2007年3月20日発行）を用いています。参考として本土の時代区分を（ ）中に明記しています。

プロフィール

多和田眞淳先生は、1907（明治40）年に那覇市首里崎山町で生まれました。

1926（昭和元）年に沖縄県師範学校本科第二部を卒業後、国頭郡安田小学校をはじめ、美里・天願・美東・西表小学校の訓導を歴任し、西表小学校・西表国民学校の教頭、首里第一国民学校訓導、県立第一中学校教授嘱託、知念・首里高等学校教官を歴任され、1948（昭和23）年までの約23年間学校現場に携わられました。



その後、沖縄民政府へ転身され、経済部農務課技官や行政法務行政課事務官、林野庁林業技術員養成所技官、琉球政府林業試験場長を歴任しました。1959（昭和34）年には、琉球政府文化財保護委員会へ異動し、1970（昭和45）年に勸奨退職されるまで、文化財の保護や保存に尽力されました。

退職後、1970（昭和45）年12月に琉球政府職員賞を受賞し、1972（昭和47）年7月に沖縄タイムス文化賞受賞、同年12月に沖縄県緑化功労賞受賞、1978（昭和53）年3月に沖縄県文化功労賞を受賞されました。

1990（平成2）年12月21日死去。（享年83歳）

多和田眞淳先生 略年譜

1907(明治40)年1月7日	父多和田真徳・母ウトの三男として那覇市首里崎山町で生れる
1926(昭和元)年3月	沖縄県師範学校本科第二部卒業
1956(昭和31)年9月	文化財専門審議員
1959(昭和34)年10月	琉球政府文化財保護委員会主事
1968(昭和43)年4月	琉球政府文化財保護委員会専門官
1970(昭和45)年10月	琉球政府文化財保護委員会勸奨退職
1972(昭和47)年7月	沖縄タイムス文化賞受賞
1973(昭和48)年12年	長年収集された考古資料を沖縄県立博物館に寄託
1976(昭和51)年3月～4月	「多和田真淳氏所蔵考古資料」特別展 主催 沖縄県立博物館
1978(昭和53)年3月	沖縄県文化功労賞受賞
1980(昭和55)年1月	古稀記念多和田真淳選集刊行会編『古稀記念 多和田真淳選集』を刊行那覇市史編集委員会委員
1990(平成2)年12月21日	没する（享年83歳）

（略年譜を作成するにあたって古稀記念多和田真淳選集刊行会編『古稀記念 多和田真淳選集』1980年を基に、文化財関係のみ取り扱い、作成した。）

著作目録

- 1956(昭和31)年 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』1956年版
- 1959(昭和34)年 「宜野湾村大山貝塚の調査概要」(共著)『文化財要覧』1959年版
- 1960(昭和35)年 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺 (一)」『文化財要覧』1960年版
- 1961(昭和36)年 「読谷村赤犬子遺跡調査報告」(共著)『文化財要覧』1961年版
「琉球列島における遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」『文化財要覧』1961年版
- 1962(昭和37)年 「地荒原貝塚発掘報告」(共著)『文化財要覧』1962年版
- 1964(昭和39)年 「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」(共著)『水産大学校研究報告 人文科学篇』第9号
「那覇市山下町第一洞 (鹿化石)発掘報告」(共著)『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』
- 1965(昭和40)年 「勝連城跡第一次発掘調査報告書」(共著)『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会
- 1966(昭和41)年 「勝連城」『日本考古学年報』14 日本考古学協会
- 1967(昭和42)年 「琉球古代の鉄の輸入」『考古学ジャーナル』14
「沖縄の先史時代」『考古学ジャーナル』15
- 1968(昭和43)年 「貝塚からみた古代越来」『沖縄風土記全集3 コザ市篇』沖縄風土記刊行会
「沖縄の文化財保護行政」『考古学ジャーナル』17
「琉球古代の鉄の輸入」『鉄と琉球』金秀鉄工KK会社
- 1970(昭和45)年 「考古学の周辺」『南島考古』創刊号
- 1971(昭和46)年 「琉球古代の鉄の輸入 (その2)」『考古学ジャーナル』59
「沖縄考古学界の諸問題」『南島考古だより』第7号
- 1972(昭和47)年 「琉球陶器の分類学的考察」『琉球の文化』第1号
「琉球陶器の分類学的考察」『考古学ジャーナル』67
- 1974(昭和49)年 「伊平屋列島の先史遺跡」『伊平屋列島文化誌』
- 1975(昭和50)年 「沖縄先史・原史時代の主食材料について」『南島考古』第4号
「今帰仁村の先史時代」『今帰仁村史』今帰仁村役場
- 1980(昭和55)年 『古稀記念 多和田真淳選集』古稀記念多和田真淳選集刊行会編
- 1982(昭和57)年 「多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅰ)」(知念勇と共著)『沖縄県立博物館紀要』第8号
- 1983(昭和58)年 「多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅱ)」(知念勇と共著)『沖縄県立博物館紀要』第9号
- 1984(昭和59)年 「多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅲ)」(知念勇と共著)『沖縄県立博物館紀要』第10号
- 1985(昭和60)年 「多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅳ)」(知念勇と共著)『沖縄県立博物館紀要』第11号
- 1986(昭和61)年 「多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅴ)」(知念勇と共著)『沖縄県立博物館紀要』第12号

(著作を作成するにあたって古稀記念多和田真淳選集刊行会編『古稀記念 多和田真淳選集』1980年を基に、論文等のみを集成し、新聞記事等は省いた。)

多和田眞淳先生が型式決定した土器について

多和田眞淳先生は「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」の中で、『沖縄の貝塚から本土の真正縄文土器がでないという』意見に対し、「本土の縄文時代においても終始縄文が登場するものではない」と指摘。沖縄の土器を縄文式系土器と位置付け、〈呼び馴れた縄文土器で結構である〉と提唱しています。奄美から沖縄に分布する土器を総称して、琉球式縄文土器と名付けました。

これを区分して、伊波式土器、荻堂式土器、大山式土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器、八重島式土器、平安名式土器、宇宿深道式土器、面縄第二式土器、喜念式土器等と唱えたいとあります。それ以外に、川田原式土器や具志頭城式土器、フェンサ城式土器、面縄第一式土器、運天式土器、兼次古島式土器等の土器も型式設定されています。しかしながら、器種や器形、胎土等についての詳細な説明や図面もなく、写真と文様のみの説明が紹介されているのみです。

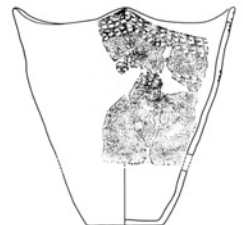
今回、現在も使われている5型式（伊波式、荻堂式、大山式、カヤウチバンタ式、宇佐浜式）について、研究状況を踏まえ、それぞれの土器型式についてまとめてみました。

い は
伊波式土器 沖縄貝塚時代前期（縄文後期）※琉球貝塚の編年表では前期

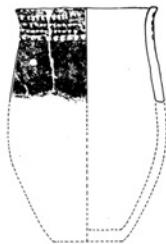
標式遺跡：沖縄県うるま市（旧石川市）伊波貝塚出土の土器を標式とする。

器形：深鉢形で底部は平底。口縁は外反し、4個の山形突起をつける。

文様：口唇部、口頸部に文様が施され、3段で構成されたものが主流。上下段に点刻文、短沈線文等を施し、中段に綾杉文を施す。施文具は先が二又になっているもの、管状のものを半分もしくは三分割したもの等を使用。



平敷屋トウバル遺跡出土



室川貝塚出土

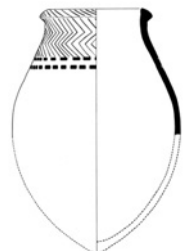
おおやま

大山式土器 沖縄貝塚時代前期（縄文後期）※琉球貝塚の編年表では中期

標式遺跡：沖縄県宜野湾市大山貝塚出土の土器を標式とする。

器形：深鉢形で底部は平底。口縁部は平坦。胴上部がやや膨らみ、口縁部へすぼまるタイプと底部から口縁部へ直線的に開く器形とがある。

文様：口頸部に横捺刻文または押引文を3条施す。施文具は先端が平たく、板状のものを使用。幅5mmのものが一般的に用いられているが、時代が下ると幅の狭いものも増える。



シヌグ堂遺跡出土

う ざ は ま
宇佐浜式土器 沖縄貝塚時代中期（縄文晩期）※琉球貝塚の編年表では後期上半

標式遺跡：沖縄県国頭村宇佐浜遺跡出土の土器を標式とする。

器形：壺形、深鉢形があり、底部は尖った例が多く平底は少ない。口縁部が肥厚し、肥厚部分を断面から見ると三角形またはかまぼこ状をしている。

文様：無文の例が多く、文様を施された例は少ない。文様は刻文、沈線が多く、施文具は先端が平たい板状のものを使用。



津堅島キガ浜貝塚出土

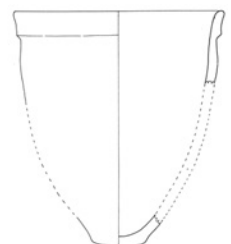
おぎどう

荻堂式土器 沖縄貝塚時代前期（縄文後期）※琉球貝塚の編年表では前期

標式遺跡：沖縄県北中城村荻堂貝塚出土の土器を標式とする。

器形：深鉢形、壺形があり、底部は平底。口縁部に4個の山形突起をつけ、外面でこぶ状の膨らみを持つのが特徴。胴上部から口縁部へすぼまり、山形突起の部分で外反。

文様：口唇部、口頸部に文様が施され、1～4段の文様帯で構成。連点文と鋸歯文を組み合わせる例が多い。施文具は伊波式土器に共通する。



津堅島キガ浜貝塚出土

カヤウチバンタ式土器 沖縄貝塚時代前期（縄文後期）・中期（晩期）
※琉球貝塚の編年表では中期から後期上半

標式遺跡：沖縄県国頭村カヤウチバンタ貝塚出土の土器を標式とする。

器形：深鉢形、壺形があり、底部は平底。口縁部は草花用植木鉢状に肥厚する。

文様：肥厚部の外面や胴の下に文様を施される例が多く、稀に口唇部にも施すことがある。この土器は資料の増加や研究により、沖縄貝塚時代前期・中期の長期にわたる型式であることが解った。

琉球貝塚の編年表（多和田編年）について

多和田眞淳先生は、1932（昭和7）年から奄美・沖縄の各島々の遺跡の分布調査を行い、1956（昭和31）年において『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』の中で「琉球貝塚の編年表」を発表しました。各地の遺跡の立地や表面採集された土器について、分析や分類等をとおして、奄美・沖縄の考古学的な編年を確立しました。

この編年表は、その後、新知見の追加や細分等もありますが、編年自体の順序は不動であり、その体系が今日も有効となっています。

なお、多和田先生は土器と時期区分について、次のように記述しています。「このカメ型土器の古いものは平底、口縁部が山形になり、幾分日本本土の中期の様相がしのばれる。沖縄のカメ型土器の形と文様の目安となるものをもって時期区分すると、琉球縄文前期、中期、後期上半は平底、後期下半は奄美大島の徳之島の面縄第一貝塚の影響を受けてくびれ平底になる。前期は半截竹管の端を使って押さえ気味に引きするようにしてつけた直線平行線文で、中期は直線文の構想は同一だが、平たい小板様のうすい断面を使って判子を押すようにした押型単直線文である。後期上半になると奄美大島の徳之島の面縄第二貝塚（中期）で盛行する櫛目文が入ってきて、土器文様が櫛目的になってくる。」としています。

琉 球 貝 塚 の 編 年 表

晩 期	後 期		中 期	前 期	時期別 地方別
	下 半	上 半			
	面 縄 第 一	宇宿深道・万屋 喜念・湾・中里	面 縄 第 二		奄美 大島
大原包含地・久高島御殿庭・伊是名城・伊原・平安座・シーマ御たけ	フエサ城・タタナ城・保栄茂城・座波・兼城・屋我御たけ・恩納城 天之岩戸・アカジャンガー・具志頭城・伊祖城・山田城・中城渡口 清水・越来城跡・高摩文仁・具志川城（中頭）・伊計城・中城々跡 伊波城跡・知花城跡・長浜丘陵・糸数城跡・喜瀬・久米島	屋我地連天原サバヤ・崎樋川・ミントン・野国 具志堅・牧港・読谷山渡口・川田原・名城包含地・ウルル 新城洞穴・米須・久高島アゲンハミ・宇堅	辺土カヤウチバンタ・辺土宇佐浜・地荒原・喜友名 親富祖・大田辻・新原第一・喜屋武・久高島ヤグル・城たけ （崎樋川）・平安名・内間	萩堂・八重島・与座たけ・伊波・天願・具志堅ウージ・浜元・長浜 宮城島シヌグ堂・大田・新原第二・同第三・兼次・（野国）	沖 縄 本 島
喜佐間	平西・川平貝塚群・（ニラスク）・山原 大浜フルスト原・南村・小浜フルロウ山・野底	下田原・仲間第二 仲間第一・西表大原			先 島

編年表（多和田・高宮・現行・安里）の比較

高宮廣衛氏は、多和田先生の琉球貝塚の編年表（多和田編年）の序列について妥当な見解を示しますが、1961（昭和36）年に時期区分について異なる見解を提示しました。これまで、多和田編年の中期を前期後半とし、後期上半を中期、後期下半を後期としました。これは、遺跡の立地や文化的背景、土器型式の比較等から後期の位置付けについて相違を表しています。また、高宮氏は多和田編年の晩期は原史時代とし、先史時代から外しています。さらに、国際会議で「castle period」と表現し、「城時代」として別の時代を設定しています。その後、高宮氏の編年の呼称は一般化しますが、新知見によって呼称が変わるようになります。

1975（昭和50）年の読谷村渡具知東原遺跡^{とぐちあがりばる}における爪形文土器（ヤブチ式土器や東原式土器）や縄文前期の条痕文土器^{しょうこんもん}・管畑式土器等^{そばた}の出土により、時期区分の枠組みに「早期」が追加され、現行編年はこれまでの三時期区分から四時期区分に追加修正されます。

高宮氏は現行編年の問題点を踏まえ、1976（昭和51）年に縄文文化に対応する時代を前期、弥生およびそれ以降に存続した文化を後期とし、更に、前期を五期、後期を四期区分し、高宮暫定編年を確立します。その後、高宮暫定編年は新知見や土器研究等、時代の呼称の変更や修正等を行っています。

また、安里嗣淳氏は多和田編年の後期について評価を行い、多和田編年の枠組みを踏襲し、独自の編年表を確立しています。

多和田編年 (1956)			高宮編年 (1961)			高宮暫定編年 (1978～1992)						現行編年 (1975)			安里編年 (2002)			本土																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
															旧石器時代																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						

遺跡解説

のぐにかいづかぐん 野国貝塚群

所在地：^{か で な ちやう あざかね く}嘉手納町 字兼久

発見年：1955（昭和 30）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代前・後期下半

発掘調査年月日：野国貝塚 1959（昭和 34）年

野国貝塚群B地点

第1次 1981（昭和 56）年1月19日～1981（昭和 56）年3月20日

第2次 1981（昭和 56）年11月5日～1982（昭和 57）年2月20日

調査主体者：野国貝塚 J. B. バード、G. F. エクホルム（ニューヨーク自然史博物館）

野国貝塚B地点 沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：野国貝塚 学術調査

野国貝塚B地点 嘉手納飛行場と関係する排水路改修工事に伴う緊急発掘調査

遺跡の種類：貝塚

遺跡の時代・時期：野国貝塚 沖縄貝塚時代前期（縄文後期）、後期（弥生時代～平安時代）、

野国貝塚B地点 沖縄貝塚時代早期（縄文早・前期）

遺跡の概要：野国貝塚群は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、前期と後期下半に位置付けられています。

野国貝塚群は、地点によって出土する遺物の性格が異なるので、A・B・C地点と呼称しています。A・C地点は、1955（昭和 30）年に多和田眞淳先生によって発見され、その後、B地点は高宮廣衛・嵩元政秀両氏によって発見されました。B地点は、那覇防衛施設局の排水路の改修工事に伴い、1981（昭和 56）年と1982（昭和 57 年）に発掘調査が行われました。発掘調査の結果、遺跡は三時期からなり、上層から縄文前期じやうこんもんの条痕文土器、中層から爪形文土器つめがたもん（ヤブチ式土器、東原式土器）、下層から無文の尖底土器が出土し、現時点での沖縄最古の土器として特筆されます。石器は石斧（刃部磨製石斧）が最も多く、石斧の製作道具である砥石や敲き石、台石なども見つかったことから、現地で石斧をつくっていたことがうかがえます。

備考：多和田先生が発見した遺跡はA・C地点ですが、B地点は同じ野国貝塚群に含まれており、重要な遺跡であることから紹介しました。

指定区分（国・県・市町村）：県指定史跡
1956（昭和 31）年10月19日
（野国貝塚）
※琉球文化財指定埋蔵文化財
1956（昭和 31）年10月19日

調査報告書：岸本義彦・編 野国貝塚群B地点発掘調査概要 沖縄県文化財調査報告書第52集 1983年3月
岸本義彦・編 野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第57集 1984年3月



発掘調査の状況

いんぶかいづか 伊武部貝塚

所在地：^{おん な そん}恩納村 ^{あざ な か ま}字名嘉真 ^{ばる}ヤーシ原

発見年：1954（昭和29）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代後期下半

発掘調査年月日：第1次 1980（昭和55）年12月9日～1981（昭和56）年9月20日
第2次 1981（昭和56）年11月2日～1982（昭和57）年2月5日

調査主体者：沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：国道58号拡幅工事に係る緊急発掘調査

遺跡の種類：貝塚・集落跡

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代早・前・中期（縄文中・後・晩期）、後期（弥生時代～平安時代）

遺跡の概要：伊武部貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期下半に位置付けられています。

1980（昭和55）年、1981（昭和56）年に道路拡張工事に伴う発掘調査が行われ、その結果、上層の沖縄貝塚時代後期の遺物包含層は破壊されていましたが、下層の沖縄貝塚時代前期の遺物包含層は道路の下に残存していることが確認されました。

出土した主な土器は、沖縄貝塚時代前期の^{なかどまり}仲泊式や^{いは}伊波式、^{おぎどう}荻堂式、^{おおやま}大山式、^{むろかわ}室川式、^{うざはま}中期の宇佐浜式、^{おもなわぜんてい}奄美系土器の^{おもなわとうどう}面縄前庭式や^{かとく}面縄東洞式、^{おもなわせいどう}嘉徳Ⅰ式A、^{おもなわせいどう}面縄西洞式等があります。

遺構は、^{しきいしじゅうきょし}敷石住居址や^{しゅうせきろ}集石炉が検出され、住居址内から奄美系土器が出土しました。伊武部貝塚は、奄美・沖縄両諸島の土器文化圏のかかわりを知る上で重要な遺跡となっています。

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：上原静・編 伊武部貝塚発掘調査速報 1981
上原静・編 伊武部貝塚発掘調査報告書
国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査 遺構・貝製品・石器・貝殻編 沖縄県文化財調査報告書第51集 1983



石敷住居址の検出状況

ひゃく な だい に かい づか 百 名 第 二 貝 塚

所 在 地：^{なんじょう し}南 城 市 ^{たまぐすく}玉 城 ^{あざひゃく な}字 百 名

発 見 年：1955（昭和 30）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：－

発掘調査年月日：1980（昭和 55）年 1 月 7～ 18 日、3 月 4～ 14 日

調査主体者：沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：国道のバイパス建設に伴う試掘調査

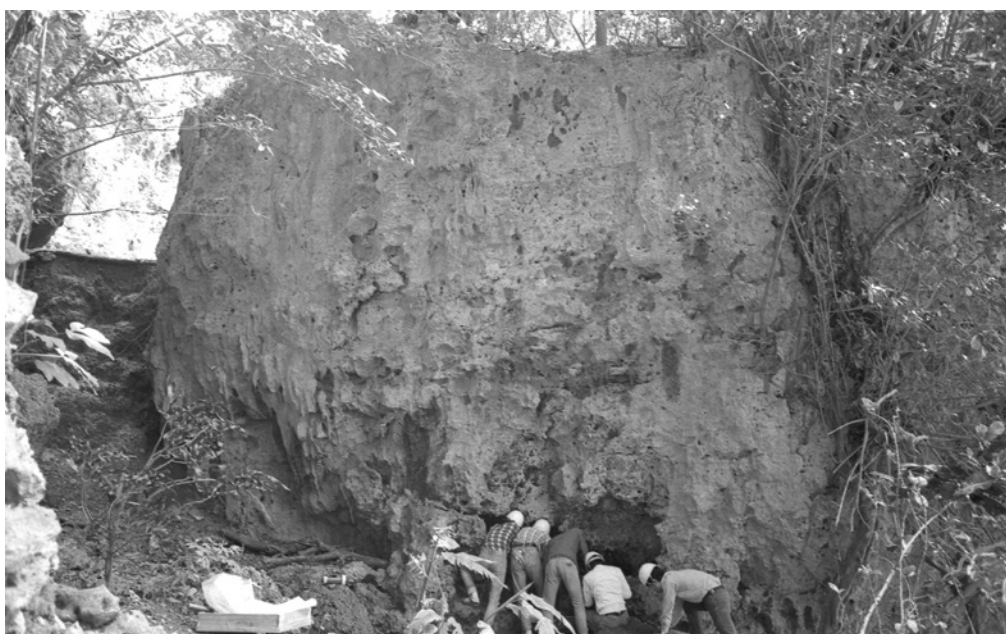
遺跡の種類：貝塚

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前期（縄文後期）

遺跡の概要：百名第二貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）では、時期について言及されていません。

また、発見されたときは『琉球列島の貝塚分布と編年の概念』に百名貝塚という名称で記載されていますが、現在は百名第二貝塚に変更されています。

1980（昭和 55）年の試掘調査で、沖縄貝塚時代前期の伊波式^{いは}や荻堂式^{おぎどう}、奄美系^{おも}の面縄前庭式土器^{なわぜんてい}、両刃^{まさ}の磨製石斧^{せいせき}、サメの歯を模倣した貝製の装身具^{そうしんぐ}や貝輪^{かいわ}等が出土しました。



試掘調査の状況

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：安里嗣淳ほか 沖縄県玉城村 百名第二貝塚の試掘調査 沖縄県文化財調査報告書第 38 集
1981 年 3 月

なか そ ね かい づか 仲宗根貝塚

所在地：^{おきなわ し}沖縄市 ^{あざなか そ ね ちよう}字仲宗根 町

発見年：1933（昭和8）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代中、後、晩期

発掘調査年月日：① 1966（昭和41）年11月3・4、6、13・14日、
② 1979（昭和54）年8月20日～9月13日

調査主体者：①琉球政府文化財保護委員会、②沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①ホテル建設工事に伴う緊急発掘調査、②範囲確認調査

遺跡の種類：貝塚

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前～中期（縄文後～晩期）、グスク時代（平安時代末～室町時代並行）

遺跡の概要：仲宗根貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、中期に位置付けられています。

1933（昭和8）年に多和田眞淳先生によって発見され、以後、米軍施設工事やホテル建設等により、幾度か破壊を受けました。1966（昭和41）年と1979（昭和54）年に発掘調査が行われ、第1・2次調査において、白磁や青磁、グスク土器、カムイヤキ、鉄製品（鉄鎌）、玉類、土製勾玉^{まがたま}、炭化物、自然遺物（貝、獣骨）等も出土しています。沖縄貝塚時代前期^{いは}の伊波式土器を主体とし、奄美系土器^{おもなわとうとう}（面縄東洞式、嘉徳Ⅰ式A、嘉徳Ⅰ式B、嘉徳Ⅱ式）、中期^{うさはま}の層から宇佐浜式土器、カヤウチバンタ式土器、石斧、骨

製品等が出土しています。また、門歯を抜歯したヒト^かの下顎骨^{かくこつ}も発見されています。なお、第2次調査の結果、貝塚の崖上部と拝所^かの広い範囲に遺跡が存在することが確認されました。



A地区の発掘調査の状況

指定区分（国・県・市町村）：なし

※ 1956（昭和31）年10月19日に「琉球縄文中期、後期、晩期の土器が得られる貝塚で、越來村の発祥地と思われる。仲宗根ウガンという拝所になって居り、戦後は殿があった。」との理由で、琉球政府の埋蔵文化財に指定される。1966（昭和41）年10月下旬、ホテル建設工事のために貝塚の破壊を受けて、琉球政府文化財保護委員会が緊急に発掘調査を実施した。調査終了後、仲宗根貝塚の主要部は完全に破壊されたとして、文化財保護委員会は1967（昭和42）年に指定埋蔵文化財の解除を決定した。

調査報告書：安里嗣淳ほか 仲宗根貝塚 第一・二次発掘調査概報 沖縄県文化財調査報告書第33集 1980

き ゆ な かい づか 喜友名貝塚

所 在 地：^{ぎ の わん し}宜野湾市 ^{あざ き ゆ な}字喜友名 ^{こ あざ き ゆ な ばる}小字喜友名原

発 見 年：1954（昭和 29）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代後期上半

発掘調査年月日：① 1981（昭和 56）年

② 1996（平成 8）年 11 月 18 日～1997（平成 9）年 12 月 22 日

調査主体者：①宜野湾市教育委員会、②沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①分布調査

②宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査

遺跡の種類：集落跡

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前期（縄文後期）、グスク時代（平安時代末～室町時代並行）、近世、近代

遺跡の概要：喜友名貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期上半に位置付けられています。

喜友名貝塚、又は喜友名グスクの所在する喜友名集落は、宜野湾市の北側に位置します。遺跡は集落の北はずれ標高 47～55 m の中位段丘に立地しており、戦前はこの地より北谷村桑江から伊佐・大山に広がる田圃を見おろせる風光明媚な場所です。

1996（平成 8）～1997（平成 9）年に発掘調査が行われ、最も東側にあるⅠ地区は、もともと小高い丘陵の地形をなしていたと思われます。西側に続くⅡ地区は谷状地形になっており、さらに西側のⅢ地区は幾分標高の高い丘陵になっています。

発掘調査の結果、Ⅰ地区は沖縄貝塚時代前～中期の時期とグスク時代が重複し、Ⅱ地区は近世～近代の時期が主体で、Ⅲ地区はグスク時代を中心に近世の時期まで利用されていることが確認され、地区によって遺跡の時期が異なっていることがわかりました。



Ⅰ地区の竪穴住居址の検出状況

Ⅰ地区は近世～近代の時期が主体で、Ⅲ地区はグスク時代を中心に近世の時期まで利用されていることが確認され、地区によって遺跡の時期が異なっていることがわかりました。

その他：本遺跡は1900（明治 33）年に、加藤三吾氏が「喜友名城近傍」において石斧の破片を採集したことにはじまり、1954（昭和 29）年の多和田眞淳氏の調査へ受け継がれました。

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：呉屋義勝ほか 土に埋もれた宜野湾 宜野湾市教育委員会 1989 年 3 月

比嘉聡ほか 喜友名貝塚・喜友名グスク 宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（Ⅰ） 沖縄県文化財調査報告書第 134 集 1999 年 3 月

ちばないせき 知花遺跡

所在地：^{おきなわ}沖縄市 ^{あざちばな}字知花 ^{ぐすくばたばる}城畑原

発見年：1960（昭和35）年6月4日

琉球貝塚の編年（多和田編年）：－

発掘調査年月日：① 1962（昭和42）年7月28日～8月12日
② 1977（昭和52）年
③ 1984（昭和59）年1月～7月

発掘調査の原因：①採石工事に伴う緊急発掘調査
②範囲確認調査
③沖縄自動車道建設に伴う緊急発掘調査

調査主体者：①琉球政府文化財保護委員会、②・③沖縄県教育委員会

遺跡の種類：包蔵地

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前～中期（縄文後～晩期）

遺跡の概要：知花遺跡は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期下半に位置付けられています。

この遺跡は1960年に多和田眞淳先生と金城盛雄氏によって発見されましたが、当時すでに遺跡の大部分は採石工事によって破壊されていました。1962（昭和42）年の発掘調査によると、採石場内のA～Dの4地点のうち、B～Dの3地点はほとんど壊滅の状況にあり、遺物包含層がわずかに確認されただけでした。A地点から、奄美系土器や、



発掘調査の状況

^{いは}伊波式、^{おぎどう}荻堂式、^{おおやま}大山式、^{むろかわ}カヤウチバンタ式、^{むろ}室川式、^{かわじょうそう}室川上層式、^{うざはま}宇佐浜式などの土器が見つかりました。このことからA地点は伊波式から、宇佐浜式の時期に至るまでの遺跡と考えられていますが、中でも宇佐浜式が圧倒的に多いことから、A地点は宇佐浜式の時期（貝塚時代中期）が主体であったと考えられています。

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：①多和田眞淳ほか 知花遺跡発掘調査概報 知花遺跡群 沖縄県文化財調査報告書第16集 1978年3月
②安里嗣淳ほか 知花遺跡群の範囲確認調査 知花遺跡群 沖縄県文化財調査報告書第16集 1978年3月
③安里嗣淳ほか 知花遺跡 沖縄県文化財調査報告書第77集 1986年3月

備考：遺跡発見当初、知花貝塚としていたが、現在、知花遺跡としている。
なお、知花遺跡は金城盛雄氏と共同で発見された。

みやぎしま 宮城島シヌグ堂遺跡

所在地：うるま市 ^{よ な し ろ あ ざ う え は ら ま ん か わ ば ら な か ば ら} 与那城 字上原 万川原・仲原

発見年：1933（昭和8）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代前期

発掘調査年月日：① 1975（昭和50）年12月5日～1975（昭和50）年12月8日
②第1次 1982（昭和57）年1月31日～1982（昭和57）年3月25日、
第2次 1983（昭和58）年5月31日～1983（昭和58）年8月31日、
第3次 1984（昭和59）年11月13日～1984（昭和59）年11月27日

調査主体者：①・②沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①宮城島シヌグ堂遺跡地域内水道管理設溝の観察
②土地改良事業に伴う発掘調査

遺跡の種類：集落跡

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前～中期（縄文後～晩期）

遺跡の概要：宮城島シヌグ堂遺跡は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、前期に位置付けられています。

発見されたときは宮城島シヌグ堂貝塚の名称で記載されていますが、現在は宮城島シヌグ堂遺跡に変更されています。

数回行われた調査のうち、1975（昭和50）年と1982（昭和57）～1984（昭和59）年に県による発掘調査が行われました。遺跡は標高90mの琉球石灰岩丘陵上及び東崖下に立地します。東崖下は沖縄貝塚時代前期の貝塚で、^{おぎどう}荻堂式や^{おおやま}大山式等の土



第40号竪穴住居址で検出された
チャート製石鏃の出土状況

器、貝製品、骨製品等が出土しています。丘陵上は沖縄貝塚時代中期の遺跡で、^{たてあな}竪穴住居址（40基）や^{れきしょう}礫床住居址（12基）、礫床遺構（7基）、屋外炉址（1基）、土留め石積み等が確認され、集落遺跡ということがわかりました。カヤウチバンタ式や^{むろかわ}室川式、^{うさはま}宇佐浜式の他に、^{せんてい}尖底の鉢形土器や^{ちょう}長頸の土器等も出土しています。

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：金武正紀ほか シヌグ堂遺跡 第1・2・3次発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第67集 1985年3月

く め じま おお はら かい づか 久米島大原貝塚

所 在 地：く め じま あざおおはら か さ せ
久米島町 字大原 加佐瀬

発 見 年：1955（昭和 30）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代中期

発掘調査年月日：1979（昭和 54）年 5 月 28 日～ 1979（昭和 54）年 7 月 6 日

発掘調査の原因：範囲確認調査

調査主体者：沖縄県教育委員会

遺跡の種類：貝塚

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代前～中期（縄文後～晩期）

遺跡の概要：久米島大原貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、中期に位置付けられています。

1979（昭和 54）年に土地改良事業に伴う範囲確認調査が実施されました。同貝塚は場所によりそれぞれ時期が異なります。A 地点の発掘調査の結果、出土土器は、カヤウチバンタ式、う ざ は ま い は おきどう
宇佐浜式を主体とし、他に伊波式や萩堂式などがあります。注目すべきものとして、九州縄文晩期の黒川式類似土器が得られています。貝製品はゴホウラ製貝輪、スィジガイ製利器、ヤコウガイの蓋製敲打器（ハンマー）が多く、また石斧やすりいし いし
磨石、石皿などが出土しました。遺構では、石列遺構や方形石組遺構、集石遺構が検出されています。石列遺構は居住空間との関連が予想され、方形石組遺構は石組や石組内の状況から、貯蔵穴と見られています。



方形石組遺構（SX01）の検出状況

指定区分（国・県・市町村）：県指定史跡 1956（昭和 31）年 10 月 19 日

※琉球政府指定埋蔵文化財 1956（昭和 31）年 10 月 19 日

調査報告書：当真嗣一ほか 久米島大原貝塚 沖縄県文化財調査報告書第 32 集 1980 年 3 月

う ざ は ま い せ き 宇佐浜遺跡

所 在 地：^{くにがみそん}国頭村 ^{あざへど}字辺戸 ^{こあざうさばる}小字宇佐原

発 見 年：1954（昭和 29）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代後期上半

発掘調査年月日：①第1次 1967（昭和 42）年 8 月、第2次 1969（昭和 44）年 3 月、
第3次 1969（昭和 44）年 12 月～1970（昭和 45）年 1 月、
第4次 1971（昭和 46）年 3 月
② 1986（昭和 61）年

調査主体者：①琉球政府文化財保護委員会、②沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①遺跡確認調査、②重要遺跡確認調査

遺跡の種類：集落跡

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代中期（縄文晩期）

遺跡の概要：宇佐浜遺跡は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期上半に位置付けられています。

発見されたときは辺戸宇佐浜貝塚の名称で記載されていますが、現在は宇佐浜遺跡に変更となっています。

1968～71（昭和 43～46）年の間に、琉球政府文化財保護委員会によって発掘調査が4回実施され、調査から方形の石組遺構が数基検出されました。内部は周囲よりいくぶん落ち込んでおり、炉址と見られる焼土部分も発見されていることから、石組住居址と考えられています。遺物は石組遺構内から集中して発見されました。土器は無文化の進んだ壺形と甕形があり、特に壺形の宇佐浜式土器が大半を占めています。

これらの土器や石組遺構は奄美大島の^{うしゆく}宇宿貝塚の宇宿上層式土器と石組遺構の形態が酷似することから、沖縄ー奄美間に文化的交流があったことが知られるようになりました。また、開平地に立地することと、貝類や獣魚骨類が少ないことなどは、沖縄貝塚時代中期の遺跡の特徴です。



安須森の頂上から見た宇佐浜遺跡（1987 年）

指定区分（国・県・市町村）：国指定史跡 1972（昭和 47）年 5 月 15 日

※琉球文化財指定埋蔵文化財 1956（昭和 31）年 10 月 19 日

調査報告書：岸本義彦ほか 宇佐浜遺跡発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第 93 集 1989 年 3 月

い え じま く し ば る か い づ か 伊江島具志原貝塚

所 在 地：伊江村 字川平

発 見 年：1957（昭和 32）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：－

発掘調査年月日：① 1963（昭和 38）年 12 月 23 日～ 28 日、
② 1970（昭和 45）年 12 月 26 日～ 29 日、③ 1984・85（昭和 59・60）年、
④ 1995（平成 7）年 10 月 18 日～ 1995（平成 7）年 12 月 26 日

調査主体者：①・②琉球大学法文学部史学科、③・④沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①・②学術調査、③採砂工事に伴う緊急発掘調査、
④県道改修工事に伴う緊急発掘調査

遺跡の種類：貝塚・墓地

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代早・前・中期（縄文前・後・晩期）、後期（弥生時代～平安時代）

遺跡の概要：具志原貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、時期については言及されていません。

同貝塚は伊江島の南海岸にあり、伊江湾に面した砂丘上に立地しています。 数回の発掘調査が行われ、沖縄県内で初めて弥生土器が発見された遺跡として知られています。

1984（昭和 59）年の調査では、九州縄文時代前期に相当する条痕文土器や、貝輪や貝匙といった貝器文化を物語る多くの貝製品が出土しています。さらに、交易のためのストックと考えられるイモガイ等の集積も数ヶ所確認され、弥生土器やそれを真似た土器の出土からも盛んな交易が行われていたと考えられています。また、埋蔵人骨も確認

されています。

1995（平成 7）年の調査では、貝塚時代後期の尖底とくびれ平底の古さの順が確認され、編年を裏付ける貴重な資料です。

具志原貝塚は、約 5000 年の貝塚時代早期にまで遡ることができる複合遺跡として、貴重な貝塚となっています。



発掘調査の状況（1985 年）

指定区分（国・県・市町村）：国指定史跡 1986（昭和 61）年 6 月 9 日
追加指定 1998（平成 10）年 1 月 16 日
※県指定史跡 1974（昭和 49）年 11 月 11 日

調査報告書：①友寄英一郎・高宮廣衛 伊江島具志原貝塚調査概報 琉球大学法文学部紀要 社会編 第 12 号 1968 年 3 月
②友寄英一郎ほか 伊江島具志原貝塚 伊江村教育委員会 1978 年 3 月
③安里嗣淳ほか 伊江島具志原貝塚の概要 第 61 集 沖縄県教育委員会 1985 年 2 月
④岸本義彦ほか 伊江島具志原貝塚発掘調査報告 第 130 集 沖縄県教育委員会 1997 年 3 月

まきみなとかいづか 牧港貝塚

所在地：^{うらそえ}浦添市 ^{あざまきみなと}字牧港 ^{とうばる}桃原

発見年：1933（昭和8）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代後期下半

発掘調査年月日：1983（昭和58）年11月～1984（昭和59）年2月

調査主体者：沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：県道153号バイパス新設工事に伴う発掘調査

遺跡の種類：貝塚

遺跡の時代・時期：沖縄貝塚時代後期（弥生時代～平安時代）、
グスク時代（平安時代末～室町時代並行）

遺跡の概要：牧港貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期下半に位置付けられています。

牧港貝塚は、牧港川の南西側縁辺部沿い海拔5～6m前後の岩丘に立地しています。

この岩丘の下端部に海蝕によって形成された半洞穴が残っており、貝塚の中心部をなしています。1983（昭和58）年に実施した発掘調査で、洞穴内から出土したゴホウ
う製の貝輪^{かいわ}や弥生系の土器、磨製石鏃^{ませいせきそく}等が出土しており、奄美・九州との交流を考えさせられる資料です。また、砂鉄が一ヶ所で集中的に多量に採取されたことは、沖縄の鉄の研究においても重要な貝塚となっています。



発掘調査の状況（第Ⅰ地区）

備考：なお、岩陰の部分（第Ⅱ地区）は多和田眞淳先生発見以後に発見されたので、ここでは遺物の展示と説明は割愛します。

指定区分（国・県・市町村）：なし

調査報告書：大城慧ほか 牧港貝塚・真久原遺跡 県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書第65集 1985年3月

しもたばるかいつか 下田原貝塚

所在地：^{たけとみちょう あざはてるま}竹富町 字波照間 ^{しもたばる}下田原

発見年：1954（昭和29）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代後期下半

発掘調査年月日：① 1954（昭和29）年

② 1958（昭和33）年

③第1次 1984（昭和59）年5月28日～1984（昭和59）年8月7日

第2次 1985（昭和60）年7月15日～1985（昭和60）年8月25日

調査主体者：①金関丈夫、②早稲田大学八重山調査団、③沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：①・②学術調査、③土地改良計画に伴う発掘調査

遺跡の種類：集落跡

遺跡の時代・時期：先史時代

遺跡の概要：下田原貝塚は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、後期下半に位置付けられています。

また、この貝塚は波照間島の北側海岸に面した緩やかな斜面上に立地しています。

金関丈夫・国分直一・多和田眞淳先生らにより、1954（昭和29）年に発掘調査が行われ、戦後の沖縄考古学研究の原点というべき遺跡であり、八重山諸島の編年の標式遺跡となっています。

1958（昭和33）年の早稲田大学による発掘調査で、把手を持つ土器が出土し、この土器は下田原式土器と設定されています。

さらに、1983～85（昭和58～60）年の発掘調査では、貝製品や骨製品も多く出土しています。



第2地区で検出された石斧とサメ歯製品の出土状況

下田原貝塚は、八重山諸島の編年を語るうえで、土器の無い時代よりも下田原式土器の時代が古いことを証明した貝塚のひとつでもあり、その成果は貴重なものといえます。

指定区分（国・県・市町村）：県指定史跡 1956（昭和31）年10月19日

※琉球文化財指定埋蔵文化財 1956（昭和31）年10月19日

調査報告書：金武正紀ほか 下田原貝塚・大泊浜貝塚 第1・2・3次発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第74集 1986年3月

ひら え なか もと お ん い せき 平得仲本御嶽遺跡

所 在 地：^{いしがき し}石垣市 ^{あざひら え}字平得 ^{あざ た ばる}字田原

発 見 年：1955（昭和 30）年

琉球貝塚の編年（多和田編年）：琉球貝塚時代晩期

発掘調査年月日：1975（昭和 50）年 7 月 30 日～ 1975（昭和 50）年 8 月 17 日

遺跡の種類：集落跡

遺跡の時代・時期：歴（原）史時代

調査主体者：沖縄県教育委員会

発掘調査の原因：農業基盤整備事業に伴う発掘調査

調査の概要：平得仲本御嶽遺跡は、琉球貝塚の編年表（多和田編年）で、晩期に位置付けられています。

平得仲本御嶽遺跡は、石垣市街地の東方約 2 km に位置し、平得集落とは県道をへだてた北側に所在します。遺跡の範囲は、約 35,000 m² に及ぶ広大なもので、標高約 20 ～ 25 m の琉球石灰岩上に形成されています。石垣島では最も広い平坦地であるため、戦前は日本軍による飛行場として利用されていました。そのため遺跡の立地する地域についても、その大半は破壊されました。

調査結果から、集落遺跡であるということが判明し、土器や陶磁器から推察してほぼ 15 ～ 16 世紀の頃と考えられています。



遺構の検出状況

指定区分（国・県・市町村）：なし

報告書：当真嗣一ほか 八重山石垣島 平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第 3 集
1976 年 3 月

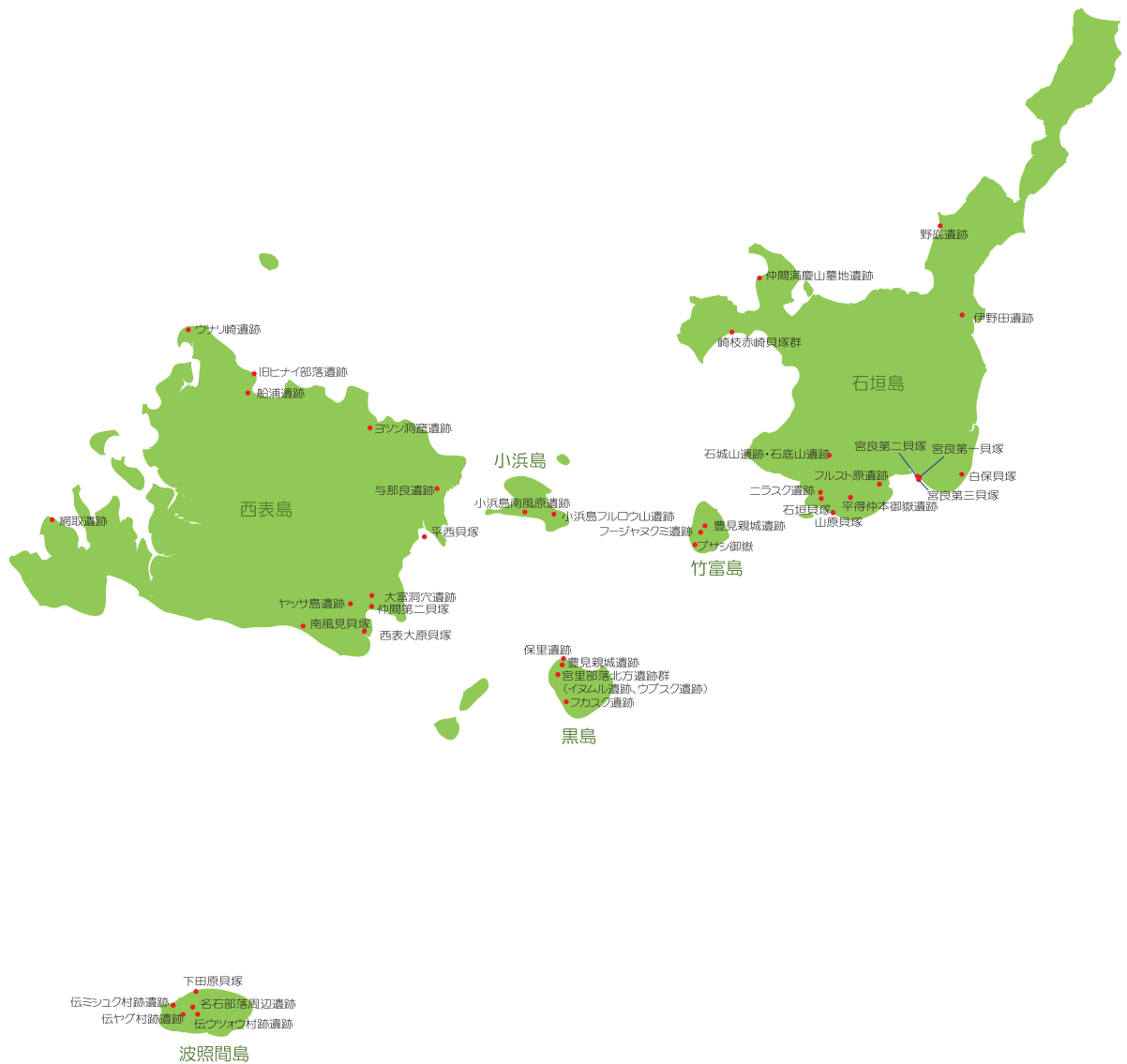
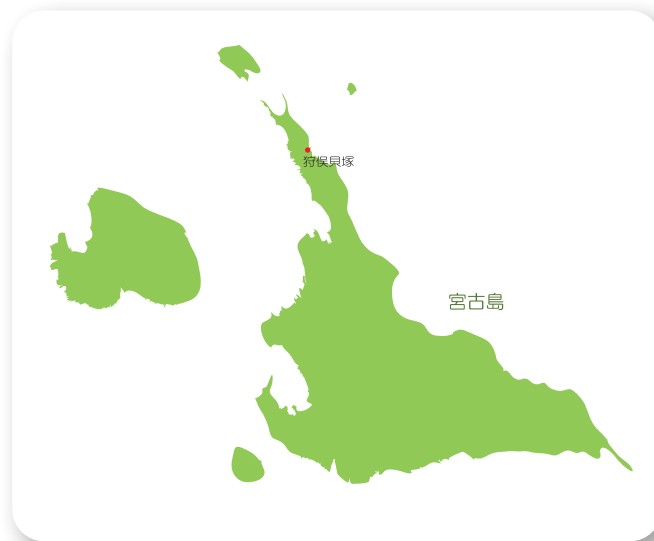
多和田先生が発見した遺跡一覧

No.	市町村名	発見当初の遺跡名	現在の遺跡名	時期	発見年月日	備 考
1	鹿児島県 奄美市	万屋貝塚	万屋遺跡	後期上半	1952年12月17日	
2	鹿児島県 喜界町	中里貝塚	中里貝塚（ケンドンガ崎貝塚群を含む）	後期上半	1952年12月21日	
3	鹿児島県 喜界町	伊佐根久遺物散布地	佐久久貝塚	－	1952年12月20日	
4	名護市	屋我地運天原サバヤ貝塚	運天原サバヤ貝塚	後期下半	1954年1月31日	県指定
5	名護市	屋我御たけ貝塚	屋我グスク遺跡群	－	1954年1月31日	
6	国頭村	辺戸上原カヤウチバンタ貝塚	カヤウチバンタ貝塚	後期上半	1954年6月17日	
7	国頭村	辺戸宇佐浜貝塚	宇佐浜遺跡	後期上半	1954年6月17日	国指定 共同発見者：山入端清次
8	本部町	浜元貝塚	浜元貝塚	前期	1954年5月23日	
9	本部町	具志堅貝塚	具志堅貝塚	後期下半	1954年5月24日	
10	恩納村	恩納城遺跡	恩納グスク	晩期	1953年	
11	恩納村	山田城遺跡	山田グスク	晩期	1953年	
12	恩納村	仲泊貝塚	仲泊貝塚	中期	1954年10月17日	
13	名護市	喜瀬包含地	部瀬名貝塚	後期下半	1953年	
14	読谷村	長浜貝塚	長浜貝塚	前期	1933年	共同発見者：与古田幸吉
15	浦添市	牧港貝塚	牧港貝塚	後期下半	1933年	
16	読谷村	読谷山渡口貝塚	渡口知貝塚	後期下半	1954年10月23日	
17	嘉手納町	野国貝塚群	野国貝塚群	前・後期下半	1955年	県指定：C 地点
18	沖縄市	仲宗根貝塚	仲宗根貝塚	中期	1933年	
19	沖縄市	八重島（ヤシマ）貝塚	八重島貝塚	前期	1954年10月15日	
20	うるま市	大田貝塚	大田貝塚	前期	1933年	
21	うるま市	地荒原貝塚	地荒原貝塚	後期上半	1933年	
22	宜野湾市	大山貝塚	大山貝塚	中期	1954年6月16日	国指定
23	宜野湾市	喜友名貝塚	喜友名貝塚	後期上半	1954年5月30日	
24	浦添市	親富祖貝塚	親富祖遺跡	後期上半	1954年	
25	うるま市	平安名貝塚	平安名貝塚	中期	1955年10月27日	県指定
26	うるま市	宮城島シマグ堂貝塚	シマグ堂遺跡	前期	1933年3月	
27	うるま市	伊計城遺跡	伊計グスク	晩期	1955年	
28	うるま市	アカジャンガー貝塚	アカジャンガー貝塚	晩期	1955年8月14日	
29	うるま市	宇堅貝塚	宇堅貝塚	後期下半	1956年5月27日	
30	うるま市	具志川城跡貝塚	具志川城跡	晩期	1955年8月14日	
31	浦添市	伊祖城遺跡	伊祖城跡	晩期	1955年8月16日	県指定
32	うるま市	平安座貝塚	平安座貝塚	晩期	1956年4月1日	
33	南城市	具志堅ウーヅ遺跡	具志堅ウーヅ洞穴遺跡	前期	1955年1月2日	
34	南城市	志喜屋貝塚	不明	前期	1955年11月28日	
35	南城市	山里貝塚	山里遺跡	前期	1955年11月28日	
36	豊見城市	豊見城城跡遺物散布地	豊見城グスク	－	1952年	
37	糸満市	糸満町稲嶺屋取遺物散布地	稲嶺屋取遺跡	－	1953年12月25日	
38	糸満市	国吉城跡遺物散布地	不明	－	1953年12月25日	
39	南城市	新原貝塚群（1～4貝塚）	新原第一貝塚～第四貝塚	一：中、二：前	1954年6月27日	
40	那覇市	識名貝塚	識名貝塚	－	1956年3月3日	
41	糸満市	阿波根城跡遺跡	阿波根グスク	－	1956年3月4日	
42	那覇市	シーマ御たけ遺跡	識名シーマ御嶽遺跡	晩期	1956年5月20日	
43	南城市	百名貝塚	百名第二貝塚	－	1955年	
44	糸満市	川田原貝塚	川田原貝塚	後期下半	1954年6月30日	
45	糸満市	喜屋武貝塚	喜屋武貝塚	後期上半	1955年12月4日	
46	糸満市	名城包含地	名城遺物散布地	－	1954年7月4日	
47	八重瀬町	新城洞穴遺跡	新里洞穴遺跡	後期下半	1954年8月	
48	糸満市	米須包含地	米須浜貝塚	－	1954年6月30日	県指定
49	糸満市	フェンサ城貝塚	フェンサグスク貝塚	晩期	1954年7月18日	
50	八重瀬町	具志頭城跡	具志頭グスク	晩期	1954年2月28日	
51	豊見城市	保栄茂城跡遺跡	保栄茂グスク	晩期	1954年	
52	糸満市	兼城御たけ遺跡	不明	－	1953年	
53	南城市	久高島ヤグル貝塚	ヤグル貝塚	－	1956年3月15日	
54	南城市	久高島御殿庭貝塚	御殿庭遺跡	晩期	1956年3月15日	
55	久米島町	大田辻貝塚	大田辻遺跡	後期上半	1955年6月14日	
56	久米島町	久米島大原貝塚	久米島大原貝塚	中期	1955年6月16日	県指定
57	久米島町	ウルル貝塚	ウルル貝塚	後期下半	1955年6月12日	
58	久米島町	清水貝塚	清水貝塚	晩期	1955年6月13日	
59	竹富町	下田原貝塚	下田原貝塚	後期下半	1954年3月	県指定
60	竹富町	仲間第二貝塚	仲間第二貝塚	後期下半	1955年12月17日	県指定

No.	市町村名	発見当初の遺跡名	現在の遺跡名	時期	発見年月日	備 考
61	竹富町	西表島大原貝塚	西表大原貝塚	後期下半	1955年12月14日	
62	竹富町	平西貝塚	平西貝塚	後期下半	1955年12月11日	県指定
63	竹富町	小浜島フルロウ山遺跡	小浜島フルロウ山遺跡	晩期	1955年12月21日	
64	石垣市	川平第二貝塚	不明	晩期	1949年5月	
65	石垣市	川平第三貝塚	不明	晩期	1949年5月	
66	石垣市	アコウスク貝塚（ニラスク貝塚）	ニラスク遺跡	晩期	1952年3月4日	
67	石垣市	山原貝塚	山原貝塚	晩期	1954年4月15日	
68	石垣市	大浜フルスト原貝塚	フルスト原遺跡	晩期	1949年5月	国指定
69	竹富町	ヤグ村貝塚	伝ヤグ村跡遺跡	－	1954年3月	
70	竹富町	長石村貝塚	名石部落周辺遺跡	－	1954年3月	
71	竹富町	南村貝塚	伝ウッォウ村跡遺跡	－	1954年3月	
72	竹富町	ミシュク村貝塚	伝ミシュク村跡遺跡	－	1954年3月	
73	本部町	瀬底貝塚	瀬底グスク	－	1957年5月7日	
74	本部町	崎本部兼久原貝塚	兼久原貝塚	－	1959年11月22日	
75	金武町	金武洞穴遺跡	金武鍾乳洞遺跡	－	1957年	
76	伊江村	伊江島浜崎貝塚	浜崎貝塚	－	1957年5月6日	県指定
77	伊江村	具志原貝塚	具志原貝塚	－	1957年5月6日	国指定
78	伊江村	伊江島西江上遺跡	西江上遺跡	－	1957年5月6日	
79	伊平屋村	伊平屋比謝原貝塚	東原貝塚	－	1937年7月26日	
80	伊是名村	伊是名貝塚	伊是名貝塚	後期上半	1957年12月	
81	うるま市	江洲祝部遺跡	江洲グスク	－	1960年4月6日	
82	浦添市	浦添村沢祝部遺跡	沢祝遺跡	－	1960年1月30日	
83	宜野湾市	大山堀割貝塚	大山堀割貝塚	後期上半	1954年	
84	嘉手納町	嘉手納ミズガマ貝塚	水釜貝塚	後期上半	1956年	
85	嘉手納町	嘉手納外耳土器出土地	嘉手納外耳土器出土地	－	1956年	
86	沖縄市	コザ市天之岩戸遺跡	天之岩戸向洞穴遺跡	晩期	1955年	
87	浦添市	浦添城（南よりの地点）遺跡	浦添原遺跡	－	1957年	
88	読谷村	瀬名波遺跡	不明	－	1956年	
89	うるま市	勝連城東方崖地一帯遺跡	不明	－	1957年	
90	沖縄市	知花貝塚	知花遺跡	後期下半	1960年6月4日	共同発見者：金城盛雄
91	那覇市	嶽下原貝塚	嵩下原貝塚	－	1960年1月1日	
92	八重瀬町	具志頭村赤頭祝部遺跡	赤頭原遺跡	－	1960年1月15日	
93	八重瀬町	具志頭村ガンデ原貝塚	ガンデ原遺跡	－	1960年1月15日	
94	八重瀬町	港川貝塚	港川遺跡	－	1955年	
95	南城市	前川ガラガラー出口の貝塚	前川貝塚	－	1956年	
96	糸満市	摩文仁城祝部遺跡	摩文仁遺跡	－	1955年	
97	南城市	久手堅ウガン離焼系土器出土地	久手堅御殿遺物散布地	－	1955年	
98	南城市	大里城遺跡	大里城跡	－	1955年	市指定
99	南城市	堀川貝塚	堀川貝塚	－	1956年	
100	石垣市	石底住居跡	石底山遺跡	－	1959年8月31日	
101	石垣市	崎枝貝塚	崎枝赤崎貝塚群	－	1959年8月28日	
102	石垣市	石垣貝塚	石垣貝塚	－	1959年11月11日	
103	石垣市	宮良第一遺跡	宮良第一貝塚	－	1949年5月	
104	石垣市	宮良第二遺跡	宮良第二貝塚	－	1955年12月19日	
105	石垣市	宮良第三遺跡	宮良第三貝塚	－	1955年12月19日	
106	石垣市	野底遺跡群	野底遺跡	晩期	1957年	
107	石垣市	仲間満慶山墓地遺跡	仲間満慶山墓地遺跡	－	1959年9月1日	
108	石垣市	川平第四貝塚	不明	－	1959年8月	
109	石垣市	白保遺跡	白保貝塚	－	1958年11月	
110	竹富町	西表島大富洞穴遺跡	大富洞穴遺跡	－	1958年11月8日	共同発見者：黒島寛松
111	竹富町	小浜島南風原遺跡	小浜島南風原遺跡	－	1955年12月20日	
112	宜野座村	宜野座村城原洞窟遺跡	城原洞穴遺跡	後期下半	1955年	
113	宜野座村	宜野座村宜野座遺跡	宜野座遺跡	後期下半	1955年	
114	金武町	金武村並里貝塚	並里遺跡	後期下半	1955年	
115	金武町	金武浜貝塚（前立川貝塚）	大兼久原貝塚	後期下半	1960年12月29日	
116	恩納村	恩納村伊武部貝塚	伊武部貝塚	後期下半	1954年	
117	恩納村	恩納村前兼久貝塚	前兼久貝塚	後期下半	1954年	
118	恩納村	恩納村仲泊第二貝塚	仲泊貝塚（第二貝塚）	後期下半	1959年	国指定
119	伊江村	伊江島ヤシントリ洞窟遺跡	ヤシントリ洞窟遺跡	後期上半	1962年3月26日	
120	うるま市	勝連村浜比嘉島はちまん洞窟遺跡	浜比嘉はちまん洞窟遺跡	プレ縄文	1964年1月	
121	うるま市	同とうしとらの竜門洞窟遺跡	浜比嘉浜川洞窟遺跡	後期下半	1964年1月	
122	うるま市	勝連村浜比嘉島中の御嶽貝塚	浜比嘉中の御嶽洞窟遺跡	後期下半	1964年1月	
123	うるま市	同上三様洞窟遺跡	不明	晩期	1964年1月	
124	うるま市	同上大あぶ洞窟遺跡	浜比嘉大あぶ洞窟遺跡	後期下半	1964年1月	

No.	市町村名	発見当初の遺跡名	現在の遺跡名	時期	発見年月日	備 考
125	うるま市	同上大あぶ洞窟の隣り洞窟遺跡	浜比嘉大あぶ洞窟の北隣り洞窟遺跡	後期下半	1964年1月	
126	うるま市	同上四柱洞窟遺跡	不明	後期下半	1964年1月	
127	読谷村	読谷村波平洞窟遺跡	波平洞穴遺跡	後期下半	1961年1月14日	
128	那覇市	那覇市ガジャンピラ貝塚	ガジャンピラ丘陵遺跡	後期下半	1959年11月10日	
129	八重瀬町	具志頭村ガラビ濠貝塚	ガラビ濠遺跡	後期下半	1961年	
130	八重瀬町	具志頭村十柱洞窟遺跡（洞窟遺跡具志頭城系）	十柱洞遺跡	後期下半	1963年	
131	八重瀬町	具志頭村十柱洞窟向ひ遺跡	十柱向かい貝塚	後期下半	1962年	
132	糸満市	糸満町山城遺跡	山城グスク	晩期	1955年	
133	糸満市	糸満町宮城遺跡	不明	後期上半	1962年	
134	渡嘉敷村	渡嘉敷島渡嘉比久貝塚	渡嘉志久貝塚	後期下半	1962年	
135	渡嘉敷村	渡嘉敷島阿波連貝塚	渡嘉敷島阿波連貝塚	後期下半	1962年	
136	石垣市	石垣島平田後原洞窟遺跡	不明	晩期	1965年	共同発見者：平田氏
137	石垣市	石垣島伊野田旧部落遺跡	伊野田遺跡	晩期	1961年5月	
138	石垣市	石城山	石城山遺跡	晩期	1947年	
139	石垣市	石垣島宇平得仲本御嶽遺跡	平得仲本御嶽遺跡	晩期	1955年	
140	竹富町	西表島船浦遺跡	船浦遺跡	後・晩期	1961年5月1日	
141	竹富町	西表島旧髭川部落遺跡	旧ヒナイ部落遺跡	晩期	1961年5月1日	
142	竹富町	西表島ヨツン洞窟遺跡	ヨツン洞窟遺跡	晩期	1961年4月5日	共同発見者：玉城 功
143	竹富町	西表島ウナリ崎遺跡	ウナリ崎遺跡	晩期	1961年3月10日	
144	竹富町	西表島与那良遺跡	与那良遺跡	晩期	1961年5月2日	
145	竹富町	西表島網取部落遺跡	網取遺跡	晩期	1947年	
146	竹富町	西表島南風見田貝塚	南風見貝塚	晩期	1965年	
147	竹富町	西表島仲間川内ヤツシャ島遺跡	ヤツサ島遺跡	晩期	1955年12月28日	
148	竹富町	黒島保里遺跡	保里遺跡	晩期	1962年11月	
149	竹富町	黒島イヌムル遺跡	宮里部落北方遺跡群	晩期	1962年11月	共同発見者：新城徳祐
150	竹富町	黒島ウブスク遺跡	宮里部落北方遺跡群	晩期	1962年11月	共同発見者：新城徳祐
151	竹富町	黒島フキスク遺跡	フカスク遺跡	晩期	1962年11月	共同発見者：新城徳祐
152	竹富町	竹富島国仲原遺跡	不明	晩期	1962年	
153	竹富町	竹富島豊見城城遺跡	豊見親城遺跡	晩期	1962年	
154	竹富町	竹富島ブサシシル遺跡	ブサシ御嶽	晩期	1962年	共同発見者：新城徳祐
155	竹富町	竹富島フージャヌクミ遺跡	フージャヌクミ遺跡	晩期	1962年	共同発見者：新城徳祐
156	本部町	本部町大浜貝塚	大浜貝塚	後期下半	1955年	
157	宮古島市	宮古島カリマタ貝塚	狩俣貝塚	晩期	1962年	
158	那覇市	首里西森遺跡	首里西森遺物散布地	晩期	1960年	
159	那覇市	山川貝塚	山川貝塚	沖・中期	1967年	
160	那覇市	識名原遺跡（A）	識名原遺跡A		1963年	
161	那覇市	魚下祝部遺跡	魚下原遺跡		1960年	
162	那覇市	壺川貝塚	壺川貝塚	－	不明	共同発見者：嵩元政秀
163	うるま市	平安座東ハンタ原貝塚	平安座東ハンタ原遺跡	－	1956年	
164	今帰仁村	越地貝塚	越地貝塚	後期下半	1972年11月21日	
165	今帰仁村	仲尾次貝塚	仲尾次貝塚	後期上半	1973年	
166	今帰仁村	謝名貝塚	謝名遺跡	晩期	1973年	
167	伊平屋村	野甫貝塚	野甫貝塚	後期上半初頭 後期下半初頭	1947年7月29日	
168	伊是名村	内花貝塚B地点	内花貝塚	後期下半初頭	1973年4月16日	共同発見者：仲田清英
169	伊是名村	勢理客貝塚C地点	不明	後期下半末期	1973年4月17日	共同発見者：仲田清英 泉 文胞□
170	伊是名村	伊是名元島遺跡	伊是名古島遺跡	－	1957年12月	
171	伊是名村	屋那覇貝塚	屋那覇島遺跡群A～C地点	前期末・ 後期上半初頭 後期下半初頭	1973年4月18日	共同発見者：仲田清英
172	伊是名村	親畑貝塚B地点	親畑貝塚	中期・一	1973年4月18日	共同発見者：仲田清英
173	国頭村	宇佐浜B貝塚	宇佐浜B貝塚		1954年6月18日	
174	本部町	マンガスク	マンガスク	－	1976年	共同発見者：下地恒昌

多和田先生が発見した遺跡分布図



×E





069.9199
ok

平成 19 年度企画展
「多和田眞淳先生の研究業績と発見した遺跡」

2007（平成 19）年 9 月 29 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
電話 098-835-8752
FAX 098-835-8754

ご案内

第28回文化講座

多和田眞淳先生発見の遺跡について

【日時】 10月6日(土) 午後2時～4時

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

【講師】 知念 勇(恩納村立博物館館長)

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754

- 開所時間 午前9時～午後5時まで(入所は午後4時30分まで)
- 休所日 毎週月曜日、国民の祝日(こどもの日、文化の日を除く)
年末年始(12月28日～1月4日)、慰霊の日(6月23日)
※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所
- 交通 ◇沖縄自動車道西原ICより車で7分
◇市外線バスターミナル発 那覇バス97番
「琉大附属病院前」下車徒歩1分